

「それはオークじゃな。」

「オークは青色の森に住むロバに似たピンク色の生きものでな。」

とペオトーじいさんがいった。シャリーと弟のジョアンリは丸い椅子にじっと、腰掛けてペオトーじいさんの話を聞いていた。

昨日、ジョアンリが小学校の帰りにピンクのロバを見たというのだ。

「小学校への道の林を抜けたところで、北の方に青色の森が見えて、その中にピンク色のロバがいて、こっちを眺めていたんだ。」

と夜、二人で眠るときに、姉のシャリーにこっそり話をした。

こっそりとシャリーだけに話をしたのは林の道を通って小学校から帰ってきたことをお母さんに話すときっと悲しい顔すると思ったからだった。

林から小学校に向かう道は、家から林の横の暗い細い道をしばらく歩いた後に高台に出て、その後は小麦畑と野原が遠くまで広がる丘の後に丘が重なる上をくねくねとのびてゆく道である。丘は、冬は遠くの海からの風に、夏は逆方向の山向こう側にある青い水をたたえた湖からの風におおわれ、いつも風が駆け抜けているようなところだった。だから、野原の草や小麦畑の小麦たちが海の波のようにうねるのがいつも見られた。小学校へ通う道としてはずいぶん遠回りをする道だったけれど、景色もよく、とてもさわやかな道だった。

ジョアンリはその道が好きだった。道の途中の高台に据わって、風の文様や草や小麦たちのうねる姿を眺めては、色々思いを巡らせるのが好きだった。そうするとあっという間に何時間も過ぎた。強い風は花びらをカラカラに乾かし、茎や葉もカラカラに枯らした。その立ち枯れた草たちが太陽の強い日差しの下では黄金の花のように見えた。それは、お父さんが時折話してくれる海の向こうの黄金の国の植物のように思え、小麦畑のうねりは海原を駆ける船に乗った気分させた。はぐれた雲の影が小麦畑を飛び移りながら動いてゆくさまは、まるで大洋の大船のようであった。

その前の日も、帰り道にそこで何時間も過ごしてしまって、帰りの遅いことでお母さんをずいぶん心配させてしまった。ジョアンリはしばらくはその道は通らないと心とお母さんに誓ったところだった。

ところが昨日、小学校では秘密にしておこうと思った黄金の花の話をすっかり友達にしまい、その証拠を示せと言われたものだから、結局昨日も、黄金の花を採るためにそのお気に入りの道を通るしかなくなってしまった。けれども、黄金の花の採取は思ったよりもはるかに難しかった。やさしく採ろうとしても、茎は容易に折れてしまったし、花の部分の粉々に壊れてしまった。たまたま、形を残して取れた部分も高い空の下では黄金の輝きをしていたものが、手のひらの上では唯の枯れた草の一切れに過ぎなかった。

「また友達たちに嘘つき呼ばわりされるのだろうか」と、ジョアンリはなんだかとても悲しい重苦しい気分となった。最悪な気分である。第一心とお母さんとに誓いをたてて一日も過ぎていないのに、約束を破ってしまった。そして、明日からはきっと嘘つき呼ばわりである。ととてもとても、海原を漕ぎ出すような気分ではなかった。泣きたい気分だったし、もうすでに涙は汚れた頬を伝わっていた。「死にたい」気分というのはこういうことだろうかとも思ったりもした。

お母さんが心配しているかもしれないことだけが、足を動かすための理由だった。「早く帰らなければ」と家への道を急いだが、翌日、黄金の花の話を友達にしなければと思うと気分も足もとても重かった。涙を流しながら、うつむき加減にとぼとぼその細い道を歩いた。

そうしたら、ハーブのような音が聞こえたのである。苦しい思いがため息として口から漏れたときだったかもしれない。聞こえた音はため息ではなく、清んだやさしい音だった。

はじめはなんだかわからなかった。でも、音はけっして大きくはないけれど、はっきりと聞こえた。だから、地面ばかり眺めていたその顔を上げて、音の方向を眺めたのだった。

そこには見慣れない青い木々と青い草と青い風からなる森が広がっていた。小麦畑がいつもある場所から緑の林のあるところまでのほんの狭い場所だけだったのだけれど、そこが青色の森と入れ替わっていたのだ。

それは今まで見たことのない風景だった。狭い範囲なのに、この世界と同じくらい広い、新しい世界の入り口のような底深さを感じさせる青い世界だった。けれども、同時にちっとも恐怖や怖さを感じさせるものではなかった。やさしい青だったし、やさしい青い木々だった。初めて見るものだったけれども、どこかでずっと昔に見たことがあるようなそういう風景だった。

そして、その青色の森の中にピンクのロバがいたのだった。目を擦っても、ロバはいた。青い世界に溶け込むような、そう輪郭だけがピンクで描かれていて、それ以外は青い森に溶け込んだようなピンクのロバだった。ロバはすでにジョアンリの姿に気づいて、ジョアンリの方を眺めていた。そして、時折空を仰いで、鳴き声をあげた。それが先ほどのハーブの音だということにジョアンリはすぐに気づくことができた。ジョアンリはなぜだか悲しい気分ではなくなっていた。とても落ち着いた気分に変わっていた。なにかやさしいものに体ごと包まれたように、安心したそんな気持ちになっていた。

ピンクのロバは、ジョアンリの方を見ていた。やさしい目で見ていた。ジョアンリは少し不思議だった。ピンクのロバとジョアンリとの間の距離は200メートルは優に離れていたし、ピンクのロバは本当にロバのような大きさしかなかったから、ピンクのロバの目がはっきり見えることがとても不思議だった。けれど、それははっきりとしていたし、とてもやさしかった。小さい頃にお母さんにくっついた時に感じたやさしさと同じくらい安らいでいた。何も言わなかったけれど、何か言われたような感じがした。

「大丈夫だよ。」  
って。

何分くらいいたのかわからないけれど、ジョアンリはそのロバと互いに見つめあっていた。もう少

し時間があれば、青色の森に吸い込まれていたかもしれない。けれど、その日はもう十分時間がたっていた。ジョアンリは「早く帰らなければお母さんが心配するだろうな」と思った。だから、その場を後にすることにしたのだ。心の中で「またね」とピンクのロバに告げて。

お母さんに約束した手前、お母さんの悲しい顔を想像するとピンクのロバのことは夕飯のときもジョアンリの心の中にしまっていた。それでも、姉のシャリーには教えたくって、眠るときになってこっそり話したのだった。

シャリーは弟の想像の世界の全てを本当だとは思っていなかったし、けれども嘘だとも思っていなかった。黄金の花の話、雲が竜に姿を変えた話、小麦畑を大きな帆船が通り抜けた話。ジョアンリの話は何度も信じ、何度も大人たちにたしなめられた。

シャリーは弟のこの嘘をつく癖を姉として改めさせねばと少し思っていたが、半分、本当かもしれないとも思っていた。ジョアンリには見えていて、私には見えない世界が、この世にはあるかもしれないと思っていた。

実際、黄金の花もその場に連れて行って見せてもらったけれど、大人が思う程の嘘ではなかった。青い空の太陽の強い光の下ではそれは強く光を跳ね返し、唯の枯れた花というより、言われてみれば、ジョアンリのいうように黄金の花に近いものだった。少なくともそう考えた方が世界が楽しくなる感じがしていた。

だから、ピンクのロバの話にしても、半分信じ、半分はジョアンリの作り話だと思った。

「ジョアンリ、本当？」

もちろん、ジョアンリはゆずらなかつた。それは翌日の今日、黄金の花の話で、また嘘つき呼ばわりされることが判っていたからであり、シャリーには自分のいう事を信じてもらいたかったからであった。第一、それは本当の話だったからだ。

それで、今日、学校から帰ってから真実を確かめに、二人で青色の森とピンクのロバを見に行くことにしたのだ。

案の定、今日はジョアンリには最悪だった。黄金の花の話は信じてもらえるはずもなく、また、嘘つき呼ばわりされてしまったのだ。けれど、反論をしようとも、言い訳をしようとも思わなかつた。青色の森とピンクのロバの話が本当であることがわかれば、嘘つき呼ばわりも終わるだろうし、きっと誰からも尊敬されるだろうと思ったからだった。だから、学校が終わるのが待ちどおしかった。

学校から帰るとシャリーを待った。シャリーが帰るとすぐに二人で林の道の方に向かった。

林の横の少し暗い道は、黙って二人で歩いた。ジョアンリは昨日のことをシャリーに色々話したかったけれども、言葉が少しも出なかつた。昼間の嘘つき呼ばわりのために自信をなくしてしまっていた。「もしかしたら、昨日見たのは僕の想像だったかもしれない。」と自分を何度も疑った。でも、

辿り着く答えはいつも同じだった。

「僕は見たんだ。はっきりこの目で見たんだ。」

「僕は嘘つきじゃないぞ」

心の中ではそういう気持ちがどんどん大きくなっていった。シャリーにはきっと僕の気持ちが判ってくれると思った。だから、ジョアンリは細い少し暗い道を歩きながら、シャリーの顔を見上げた。

シャリーはジョアンリの嘘つき癖と、本当のことを両方見比べながら、それでも本当にそんな不思議な青色の森があったら、どうすれば良いのかドキドキとして前ばかりを見て歩いていた。

「あと少しだね。」

シャリーは言った。あと少し行けば、視野がひらけてジョアンリの言った場所が見える。

空は高く、青かった。坂が急なために走ることは出来なかったから、歩く速度は思うより遅く感じた。「あと少しだね」と言ってから直ぐに、高台に出た。ジョアンリは深呼吸した。シャリーも深呼吸しながら、目を見開いた。

けれど、青色の森はそこにはなかった。そこは見慣れた小麦畑があるだけだった。青色の森も、ピンクの口バも居なかった。シャリーはやっぱり、ジョアンリのいつもの作り話だったのかと思った。

「ジョアンリのうそつき」

シャリーは言った。

ジョアンリも全ての自信をなくしそうになっていた。「僕は幻覚をみたのだろうか？」「どうして嘘ばかり見てしまうのだろうか？」目が回るように、ジョアンリは自分の中にあるものが壊れて行く気分になった。

同時に今まで堰き止めて我慢していたものが一気にあふれ出した。涙があふれ、気持ちがあふれ、シャリーを見ている顔が崩れた。

「嘘じゃない」

と涙声でジョアンリはシャリーに叫んだ。

「僕は嘘つきじゃないんだ」

ジョアンリは訴えた。そして、

「僕は本当に見たんだ」

と何度も何度も繰り返した。とても、とても悲しい気分だった。今日、学校みんなに訴えたかったことを全て吐き出すように話をした。

シャリーは、ジョアンリの姿を見て、いつもと何かが違うことを感じた。

「ジョアンリ、この話本当？」

と今度はやさしく聞いた。ジョアンリは当然、声を上げさせながら、首を縦に何度も振った。それでシャリーはジョアンリの言葉を信じたくなった。ジョアンリが嘘つきでないことを証明しなければと感じた。

シャリーはこの丘の近くに村一番の物知りのペオトーじいさんの家があることを思い出した。  
「ジョアンリ、ペオトーじいさんは知っている？」  
「ペオトーじいさんなら、ジョアンリのいう事の少しはわかって貰えるかもしれないから、これから、じいさんのお家に行こう！」  
と誘った。

ペオトーじいさんは、畑から帰ってきたところだった。  
「ペオトーじいさん、ちょっと聞きたい事があるの」  
シャリーはペオトーじいさんに声をかけた。  
「ジョアンリが青い森の中でピンクの口バを見たって言うの。そんなことってある？」  
シャリーはペオトーじいさんをつかまえて、そう聞いた。ペオトーじいさんは少し困った顔をして、二人を物置の丸い椅子に座らせたのだった。

「むかし、むかし、この世界は緑色の森の世界と、青色の森の世界とで出来上がっていた。それは遠い遠い昔の話だが、ふたつの世界は双子のようにこの世にあったのだ。緑色の森の世界には、人間やお前たちの知っている動物達が住んでいた。そして、青色の森の世界にはオーク達が静かに暮らしていたのだ。」  
とペオトーじいさんは続けた。

オークは青色の森に生える水色の草と紺色の実しか食べられない生きもので、青色の森を出ると急に死んでしまうような弱いやつだった。性格はおとなしく、やさしい眼をしておった。

青色の森は月に一度の満月の夜は青い光を内部に秘め、オークは一夜中、静かな鳴き声を上げた。その声はとてとてもこの世のものとは思えぬ程透き通っていて、ハーブのような響きをもっていた。鳴き声というより、深い深い歌のようなものだった。透き通る声は、近くに住む緑色の森に住む人間達の耳にも届いたという。その声を聞くと、争いをしていたものもその争いをやめ、静かな気分になったし、盗みをしたものも自分の罪を自然と認めるような安らかな気分となった。

青色の森の青い湖の辺には数十年に一度、夏至と満月が重なる夜にだけに咲くゼータという名のピンクの花があって、数十年に一度だけその花を咲かしていた。ゼータは太陽を中心とする世界と月を中心とする世界の交わるときに咲く花だった。オークはその数十年に一度咲いたゼータを祝うように、数十年に一度、声高らかに鳴き、青い湖の回りを自ら声に舞うのだった。

その高らかな祝いの声は、数十年に一度、青色の森のある山々を越え、緑色の森もつ遠い国々にも届いた。人々は天から降る神秘的な歌声に畏敬の念を抱き、ある者は祈りを捧げ、そうでない者も、何か大きなやさしさに包まれたような気分となり、感謝の思いに眼を閉じた。

それはきっとオークの心を表すものであり、同時に青色の森の精神を表すものだった。

実際、緑色の森の者も青色の森に一步足を踏み入れるとオークの声を聞かずとも安らかな気分となり、心が浄化されてゆくのを感じたと言われている。獲物の兎を追う狼も青色の森に迷い込めば、例え空腹であっても、その心は満たされ獲物を追いつける事が馬鹿らしく思うのか、兎に構うのをやめ尾を垂れ、青色の樹の陰でしばらくは眠ってしまうものだったらしい。

それだから、青色の森の近くの村には争いがなく、盗みもなかった。貧しいながら、汗をかき働き、お互いに仲良く、幸せを感じながら暮らしていた。緑色の森を持つ人々は青色の森の近くの村の、その平穏な暮らしをうらやみ、青色の森やオークに神聖な思いを感じていた。そして、その世界が永遠に続く事を心から祈ったものであった。

しかし、時間がゆっくりと流れていた頃にはうらやまれた森も、やがて急ぐことが良しとされる頃となると、うとましく思われるようになった。

狩人達も獲物を売る事で暮らしをたてるようになると、日に幾頭もの獲物を仕留めねばならなくなった。だから、狩の心が乱されると青色の森を恐れた。

遠くの国から来て遠くの国へと急ぐ旅人達も、青色の森に迷い込むと焦る気持ちやはやる気持ちが失せるとの噂を聞き、青色の森を避けて遠回りの道を選んだ。

時代は火薬で金属の玉を飛ばす武器が売り買いできる時代となっていた。緑色の森のある世界では、汗をして働く者と、汗をせず裕福に暮らす者達が力を持ち始めるようになっていた。若者は汗して働くより、汗せずお金を儲けることを格好がよいと思うようになっていた。そうなるや青色の森は決して人々を幸せにしなくなっていたかもしれない。

青色の森の近くの村で育った若者は動作がのろいとものしられ、正直さゆえによく騙された。だから、青色の森の近くの村は「遅れた村」と笑われた。同時に、青色の森を持つ国々も時代に遅れた国だと隣国からうわさになっていた。

あるとき、青色の森を臨む国は、緑色の森を多く持つ国と小さな争いを起こしてしまった。緑色の森を多く持つ国は少しでも領土を広げようという野心をもった国だった。そのため、その小さな争いはすぐに戦争へと移っていった。

青色の森を臨む国は、国境の多くを青色の森で囲まれていたためにそれまで戦争というものを経験したことがなかった。一方、緑色の森を持つ国は、大砲や鉄砲など多くの武器を持ち、幾度も戦いに勝ちのびてきた。戦いは遥かに青色の森を臨む国にとって不利だと思われた。

そこで、青色の森を臨む国は、青色の森を挟んで隣にある国に助けを求めた。青色の森を挟んで隣にある国とは、以前は青い森を互いに共有することを互いに誇りに思い、様々な祭りや行事の際に互いに行き来し、国王の家族たちの血としても遠いものではなかった。しかし、青色の森を挟んで隣にある国は、早いうちから緑色の森を多く持つ国たちと貿易をして、今では青色の森を臨む国より遥かに富んでいたし、武器も軍隊も沢山持っていた。

青色の森を臨む国の国王は青色の森を挟んで隣にある国の国王に手紙をした。

青色の森を挟んで隣にある国の国王殿

緑色の森を多く持つ国より、戦いを挑まれており、苦戦をしそうである。

そこで、貴殿の国の武器を購入させて頂けないでしょうか。

青色の森を臨む国の国王

それに対して、青色の森を挟んで隣にある国の国王は喜んでそれに応じるという返事を送った。

青色の森を臨む国の国王殿

貴国の問題よく理解した。

緑色の森を多く持つ国はしたたかな国と聞く、武器だけとは言わず、我が国から十分の兵も出し、味方として戦いたいと考えている。

しかしながら、我が国の兵が、貴殿の許しなし、貴国の領土に入るとすることは、貴国からの誤解を生む可能性があると思われる。

承諾されるならば二日の内に返事を送ってきてほしい。

青色の森を挟んで隣にある国の国王

すでに、緑色の森を多く持つ国の兵はすぐそこに迫っていた。

青色の森を臨む国の国王は青色の森を挟んで隣にある国の国王へすぐさま「感謝と承諾をしめた」手紙を送ることにした。しかし、その手紙を携えた使者は、急いでいたが為に青色の森の近くを通る近道を選び、そして青色の森に迷い込んでしまったのだ。青色の森は使者の心を穏やかな気分に変え、数日間、木陰で休ませる事を許した。

約束の二日が過ぎても使者が来ない隣国の国王は、「青色の森を臨む国の国王は手紙ひとつ約束通り送り届けられない大馬鹿ものだ」と苦い顔をした。

その日、日が暮れる頃、緑色の森を多く持つ国の兵は国境の丘に集い翌日の奇襲の計画を練っていた。青色の森を臨む国を手に入れるのはもう直ぐだと大将は確信していた。

その夜は丸い満月が空高く上っていた。青色の森は青色の光をたたえ、静かに輝いていた。いつもの満月の夜のようにオークはその湖のほとりでやさしいハーブの声で歌い始めた。

歴戦の勇者たちが集められた緑色の森を多く持つ国の兵は初めてオークの声を聞いた。やさしい声だった。オークの鳴き声を聞くと、先ほどまで残虐な野心で高ぶっていた心が嘘のように落ち着いてきた。ある者は故郷を思い、ある者は家族を思い、ある者は攻め込む村の子供に自分の子供を映した。心は安らかになり、憎しみや怒りや人を傷つけようとする心はなえた。戦う意欲はすでになくなっていった。そうして、戦いを前に、荷をまとめ、すくすくと自国に帰って行ってしまっ

ただ。

オークの鳴き声が、青色の森で囲まれたその国を守ったのだった。

緑色の森を多く持つ国の国王は兵士の無様さを隠すため青色の森を臨む国に攻め込むことなく、その戦いの中止を宣言した。

すべては平穏に終わろうとしていた。

しかし、青色の森を挟んで隣にある国の国王の「青色の森を臨む国の国王は手紙ひとつ約束通り送り届けられない大馬鹿ものだ」という言葉だけが残ってしまった。その言葉だけがどこをどう伝わったのか、青色の森を臨む国の国王に伝わった。腰抜けや無能だという言葉も付け加わりながら、言葉は残酷に伝わったのである。

青色の森を臨む国の国王は言い返せない悔しさと怒りに涙まで流した。有能と思われた使者はすぐさま火あぶりとされた。また、その使者を指名した自分の馬鹿さ加減に腹が立って仕方なかった。青色の森を挟んで隣にある国の国王の意向を知っているだけに、また、言われたことが事実であるだけに、怒りの向ける場所がなかった。唯一、使者を眠らせた青色の森が責を負うべきだと考えるようになった。

怒りは怒りを招く。国王の怒りはついに青色の森とオークに向けられた。その存在自身がこの屈辱の発端に違いないのだ。国王は確信を持った。

国王は全ての青色の森を臨む国の家来を集めさせて、  
「青色の森のすべてを焼きつくせ」  
と冷酷に命じた。

家来の中にはその神をも恐れぬ命令に隣国へ逃げ込むものをいたし、姿を隠すものも居た。しかし、王の命令はその時代には絶対的な意味を持っていたので、幾つかの兵士達の手で命令は実行される事となった。

オークが鳴かない新月の夜、兵士達は四方から青色の森を遠巻きに取り囲み、緑色の星が真上に仰いだとき、一斉に火を放ったのだ。火は徐々に青色の森へと燃え広がり、やがて奥へ奥へと炎は進んでいった。時折、悲しげなハーブの音が響きわたったが、むらさきの炎をあげて、青色の森は無抵抗に燃えていった。五日五晩、むらさきの炎は天を焦がし、そして六日目の夕方、青色の森のすべては燃え尽きてしまった。

七日目の朝から、青色の森の近くの国々には水色の雨が降り始め、一ヶ月の間降り続いた。その雨に打たれた者達はなぜか心穏やかになり、病の者はその病が治ったという。医者に見放された程の重い病の者も、重い傷を持った者にもその奇跡は起き、雨は青色の森を燃した兵士の傷さえも癒した。その恵みに涙する者も多く居たし、号泣するものも少なからずいたと聞く。

「それでオーク達は怎么样了の？」



シャリーは聞いた。ペオトーじいさんは

「さぁな」

と答えた。

「湖が青色の水をたたえるようになったのはそれからじゃと聞いとる。」

「今でも、湖からの風が強いときには澄んだハーブの音が谷間に響くときもあるし、青色の森を見たという旅人に出会った事もある、ジョアンリのようにな。」

その夜、シャリーとジョアンリは夢を見た。オークが月影の中で大好きなピンクの花ゼータを眺めながらハーブのような声で鳴いている夢だった。明日からも嘘つき呼ばわりされることは何も変わらないけれど、ジョアンリはなんだかそんな事はどうでもよい気分になっていた。